

石川県人権擁護委員連合会長賞

友 達 の 力

加賀市立錦城中学校三年

南 出 健 吾

僕は、生まれてからずっと「遺糞症」という病気にかかっています。「遺糞症」とは、直腸に便がだんだん溜まっていった時に、直腸にある便をがまんする筋肉があるのに対して、便を押し出すための筋肉がほとんど機能していないために、便が直腸に溜まり続ける病気です。そのため便が溜まっていった無意識に下着を汚してしまうこともありました。

この病気を僕は三才の時に発症しました。そろそろオムツがとれていい頃なのに、なかなかとれないのでおかしいと思った母は、いろんな病院に行ったそうです。次に病院が見つからなかったら東京に移り住もうと思っていたそうです。でも、偶然、父の同僚のお見舞いに行った病院で、排便外来という特殊な外来があると教えられ、通院することになりました。その日から、僕の闘病生活が始まりました。

その時から僕は、人が成長するのを何回も恨みました。普通は、成長していくにつれて保育園、小学校など外に出る機会がだんだん増えていきます。でも、僕の現実はそんなに甘くはありませんでした。僕は、ある保育園に通っていました。僕は、便がうまく出せないで、トイレに閉じこめられてしまいました。そのため、トイレに入るのが一時期怖くなりました。そして、友達関係もうまくいきませんでした。

でも、もっと怖くて辛かったのは、小学校でした。小学校は、いろんな保育園、幼稚園からたくさん子ども達が集まる場所です。でも、僕にとっては、保育園と同じで嫌な場所でした。当時の校長先生はすごく理解のある人で、僕が入学するのを知り、僕が入学する前に、自分のポケットマネーでウォッシュレットのトイレを付けてくれました。そのためずいぶん快適になったものの、ある時、怖れていた言葉がついに出てきました。「なんか臭いね。」と教室でヒソヒソ話が聞こえてきたのです。僕はすぐにその場から逃げだしたくなりました。でも、小学校の中には、逃げる場所なんてそうありません。気づいたら僕は、保育園の頃、怖れていたトイレに逃げこんでいました。チャイムが鳴るまでずっとトイレの中にいました。そしてチャイムが鳴ると、トイレから出て教室に戻る。そんな毎日でした。その時僕は、「だれでもいいから助けて。こんなのもういやだ。」と思いました。先生に言う勇気もなく、日数が過ぎていくうちに、家族の相談を受けた先生が、ある日の朝礼で僕の事を話してくれました。そうするとみんなは、毎日僕に「トイレ行かんくてもいいんか?」「大丈夫か。」など親身になって接してくれるようになりました。

僕は、とてもうれしかったです。「人と人が話すことがこんなに楽しいなんて。」と強

く思いました。なぜなら、ずっとさけられたり、あるいは自分から一人になろうとしていたため、クラスメートとほとんど話したことがなかったからです。僕は、クラスで孤立していました。みんなが楽しく遊んでいるのをずっと遠くから見ているだけの日々でした。そんな僕でしたから、友達の言葉がとても心にしみました。そして、人と接するのが嫌だった僕は、友達をととても大切に思えるようになりました。

小三のとき、僕は手術をしました。直腸に溜まった便を全部取り出しました。便の重さは五キロもありました。そして、直腸をもとの形に戻すのに三年かかりました。その三年間続けたトレーニングは、すごく辛いものでした。何回もやめたくなくなりましたが、そういう時は、学校に行って友達と一緒に過ごすことでそんな気持ちがやわらいでいきました。退院して最初にかけてくれた「久しぶり。」や「さびしかった。」という言葉は、今も僕の心に残っています。

全国には、「遺糞症」の人がたくさんいて、僕と同じ思いをしている人達がたくさんいるはずですが、「遺糞症」だけではなくこの世界には、いろんな病気があります。僕の病気なんかよりもっと大変な病気にかかっている人もいます。そんな人達に、もっと優しい声をかけてほしいです。そのことで、病気の人達も僕のように元気づけられると思います。僕は、「生きている事をあきらめず、明日が今日より悪くても、明後日は何か変わるかもしれない。」と思えるようになりました。それは、友達の力が僕を前向きにしてくれたんだと思います。これからは、病気の人達が、いろんな人と時間や場所、思い出と一緒に作って共有できる世の中になってほしいと思います。そのために、僕の体験を病気の人やそうではない人達に話していきたいと思います。